

【葬祭編】

家族・地域を含めた

新たな「つながり」への展望と葬送墓制

ー死の文化の変容と多元化する社会的紐帯の考察ー

はじめに

山田慎也（国立歴史民俗博物館）

この研究では、現代社会における葬儀や墓などの死者儀礼の営みを通して、変容する家族や地域社会の実態と今後の展望について考察することを目的としている。とくに少子高齢化が進展する人口構造や、家族や結婚のあり方が変わり単身化がすすむ中で、葬送墓制も変容し、あらたな紐帯が求められている現状について、葬送儀礼や、墓などの葬儀後の祭祀におけるそれぞれの局面を、歴史的経緯も含めて調査研究を行うことによって、家族や社会の新たな「つながり」の形成を考察するものである。

その背景として、第1期でおこなった「無縁社会における墓と追悼」という研究課題がある。この研究は無縁化の様相をさまざまな面から焦点を当て、現状に対処する人々の営みを取りあげてきた。そこでは、戦前期に形成された家制度が戦後になると民法改正によって廃止され、その後の高度経済成長によって、夫婦と子どもを単位とした核家族をモデルとして生活が営まれ、給与所得者の増加など職業の変化によって地域共同体も弱体化し、地域社会の形態が大きく変わることが要因としてあげられる。

戦後の家族は、従来の家意識も持ちつつ、家を基盤とした死者儀礼を依然として行ってきたが、1990年代以降、少子高齢化が進みグローバル経済化による経済的停滞により、戦後の家族構造や地域社会をも一変させ、葬儀や墓制も大きく変化させることとなった。

そのなかで、従来の先祖観とは異なる家族意識や地域社会のあらたな絆、血縁を超えた死者と生者の関係性の構築など、さまざまに模索する様子を見ることができている。そこで本プロジェクトでは、こうした葬送儀礼を取りまく人々の営みから、家族や社会の新たな絆の形成を考察し、今後の展望について検討する。

その際には、人の死に際して行われる儀礼を中心とした葬送班と、その後の墓などの供養を中心とした墓制班に分かれて詳細に検討を行うだけでなく、新たな時代において必要とされているものを捉える上で、現在の事態に至る歴史的経緯を踏まえることで、事態の深層を明らかにしていきたい。今年度は初年度であり、それぞれの課題と研究の方向性を示して、来年度以降の具体的な調査の足がかりとするものである。